

特241

754

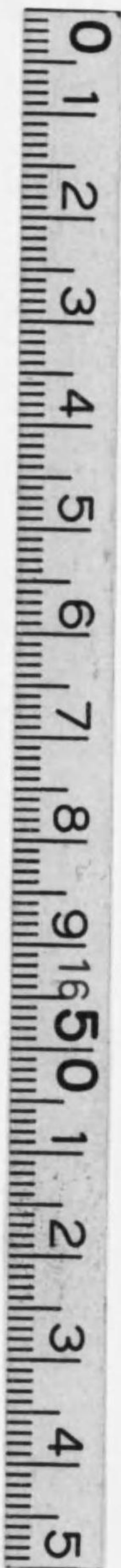
眞治著

天之御中主神の存在性

東京信

頼

社發行



始





持24  
754

### はしがき

此の天之御中主神の研究は、日本精神（著者の日本精神百首を見よ）の中心點を爲すものである。今日の日本人の多くは、支那人の或者が、石碑の表の板には、「基督教徒」と書いて、その石板をはづすと、裏の石には、「南無阿彌陀佛」と彫つてあるやうに、表では、記紀は支那よりの輸入ではなくて、日本獨立の思想であると云ひつつ、裏を熟らくと看ると、依然として、支那又は印度又は西洋からの思想を固守して居る。日本精神とは何ぞやとの間に正しく答ふる人は殆んどない。古事記の註釋すら然り、古事記の辭典すら然りである。何れも支那の十八史略宜しくで、道德の特長を宗學の樞軸としてゐる。それではいけない。道德の優者が禮拜の目標としたした至上神即ち此の神を、日本精神のルールと仰がねばならない。即ち



日本神學の神髓におかねばならない。近年からは、時局の爲。日本精神の最大光明時代が將來されて、本土又は新領土（既得及び將得の）を治める爲にも、根本的指針を示されたのである。

此の一篇は、基督知識第三百三十八號に掲げられた力作を單行本と致したもので、日本人として、何人も必ず讀まねばならない。之を怠る人は、其の文章も、其の講演も、現在及將來の笑種を作るのみならず。戦線後の思想的優勝者、言葉を換へて云はゞ、米英に對する日本既得の宗學的大勝利の光榮を分け前される人とは決して云はれないのだ、此の理解に達するや否やは、日本人か非日本人かの試金石である。

昭和十七年十二月七日落葉の中に常縁を仰ぎつつ

尾 島 眞 治 識

## 天之御中主神の存在性

尾 島 眞 治 著

そは我等は彼のうちに生き、また動き、また在ればなり、汝等の詩人達のうちにも、そは我等も彼の裔なればなり、と謂ひたる者のあるが如し。是故に我等は神の裔なれば、金または銀または石にて「作せる」人の技術また想像の彫り物を神性ある者と等しく考ふべからず。（使徒行傳第十七章第廿八、廿九節。）

日本精神の問題につきては、此の頃、時の自然と必要とに導かれて、誠に結構な研究をなさる事となつたので、感謝に堪へないのである。處が



我等國民の多數否少數の學者すらも、之を支那精神、印度精神即ち儒教又は佛教の内容に、日本精神と云ふレッテルだけを貼つてゐたが、今年になつてから、急に大轉回をしてきて日本精神の眞に近づいてきた、是は日本が英米に對する輝ある勝利の結果かとも思はれる。日本とは諸國の中の一國であるから、日本に對する誇大妄想狂めくことや、井蛙觀やでなく、世界と云ふ絶對の中に包まれて、多の中の一として考ふべく、又今迄に幾倍かする占領地を所有し得た爲に、日本の世界性、世界の日本性等々日本を今迄より廣く大きく高く考ふるやうになり、最大國否國以上としての日本を味ふやうになつてきた爲であらう、更に之を縦より考ふれば、何百年否千年以上以前より此の方の未曾有の變革となつたのだ。

本年始から興つてきた天之御中主神を中心せよ。(天之御中主神の後裔神よりも)。日本人を淫祀より救へ。祭祀の矛盾より贖へ。宗學史上の最下級

の崇拜をすてよ。潔め祓の徹底を心とせよ。大政官の祭祀改革論に注意せよ。一方で神道の不淨觀をとき、禊を云々しつつ、他方で祭他神で冒瀆する處の大神祇を天神地祇より下におく。家庭の神棚に對する家族の死、重病、月の汚れ其の他の汚事との關係を靜思せよ。敬神に於ける神道精神の不實行を考慮せよ。官國幣社其の他社頭の前に於ける御圍箱の廢止。生殖器崇拜を全廢せよ。神官神職の葬儀の問題を合理的に整理せよ。公私の學校教授、校長の惟神の解説に於ける天之御中主神への冒瀆、記紀の思想の支那傳來說、或は日本人の創造したる神話なりとの論說、記紀を政治史とのみ見て、宗學史と見ずに、日本をして無神無宗學の國とし、唯物史觀、生物史觀〔共產主義と親族關係にありとする〕の危險思想を精算せよ。等の公論正義の勃興し來り。今迄、一般より迫害され來つた眞日本精神家達に、一陽來復の思あらしむるに至つた。



併し此と共に、我等眞日本人は、後裔神中心主義者より迫害されなくなり、日本精神の國家主義より日本精神の世界性を説くとも差支なくなるに至り、我等に對する評論の物差が變り、却つて多數の人の記紀説は支那輸出説故に後裔神は絶對の神故に、天地の創造者、天之御中主神より劣れり抔と云ふは國體違反なり抔と非難されなくなり。記紀は荒唐無稽なり、之に重をおかない抔と云ふ異説を耳にしなくなつた。今迄我等は信教自由の帝國憲法の下に、反對者の非違と苦戦とを重ねる必要もなくなつた。夫らの非違者から、損害賠償を取ることも出來ず、空しく涙をのんで忍耐を重ねし昔を懐ふて、誠に今昔の感に堪へざるに至つた。とは云へど、現在に於て、我等の問題は容易になりし如きも、よくよく考慮すれば、却つて問題は過去よりも困難の度を重ねてきた。夫は天之御中主神と我等の敬ふ神との存在性の問題のそれである。或人は、保羅のアテネのアレオバゴスの

山上にてせしギリシヤの人々への説教に於て、此の問題に觸れて、或人は我等と異なる内容を現はす爲に用ゐたるものを持つて、基督道信仰の内容を宣ふ。

と保羅につきて記されたが、異なる内容と云はゞ、之を天之御中神につきても同様に保羅は云ひし事となり、保羅其の人は、宗學史の學徒としての公平な人でない、狭き宗派根性の人とはなるまい。恰も遍狹なる愛國心は地方的遍見なりと云はるる信心に迷ひかたまつた人であつたか。或は全然異なる内容か、全然同じでない内容か、基督道信仰の内容と幾パーセントは一致するのか、或は、百パーセントがギリークの詩人達と合致するのか。ここが、二千年間を隔つる我日本に於ける大問題のそれである。我等は此を解決することが基督者にも、日本の宗學にも死活の問題である。日本の思想家は、此の問題によりて禍福を分たるるのであり、基督者も正と不正



との岐路に立たされて来た。政治の上からは、多少文句を云はれる點があつても、信教自由の範圍で主張を曲げずも濟されるが、しかも政治の上から、安寧秩序を妨げたり、臣民たるの義務に背いたりしてはよろしくない。我國の優秀點としても誇るべき古事記の宗學上の無比とも云ふべき思想、即ち、古代神道は一神教なり。神と人とにロゴスの敬稱を用ゐる事、現今の理想的なる日本憲政の素因たる「神つどひ」。君の民主主義と民の君主主義のだけあはせなる國體觀（世界唯一にして無比なる）。祖先崇拜に非ずして、祖神崇拜にして。父母妻子も忠君の犠牲とする事に甘ずる高葉集防人の歌に現はるる忠誠。功利を排して、正を踏む事。博愛、愛他の精神。榮ある愛（敬神の爲、献物献身）此等を侮る事は、斷じて許すべからず、又赦すべからざる事である。

思ふに、今の國學者達、殊に公私の大學に教鞭を取る人、教學に關係深

き人々、坊間の書店に、國體の根基とか、惟神の大道とか、古事記講解、日本紀の研究とか、萬葉集の解説とか、日本の精神とか、日本國體論とか云ふ書物に名を連ねる方々も、今後、其の著書を檢閲的に披見して行くと、決して滅公奉私、危険思想なしとは云はれない。

其等の重なるものを舉げて見ると、先に某官廳の考證課の主任であり、今は某大學の神道講座の最高教授たる某氏は、其の神祇史や、神道論やに於て、「天之御中主神、高皇產巢日神、神皇產巢日神は、高天原に生れた神」とある。それでは生れない前には神はなしとなり、唯物史觀となり、共產主義の兄弟なる無神無靈魂となるのだ。かくて其の一面には、日本國體や日本精神やを説き敬神忠君を説いてゐる。恰も根本神よりも、後裔神を説き、神よりも物質を勝れりと語ると同一である。

又或人々は、惟神の神は誰ぞやと問へば、天之御中主神とは云はない。



それは神話だ、人間の創作神だ。と云つて、後裔神に惟神を結び付ける、之は恐らく、國學の博士の十中の九迄はさうであらう。今年の八月四日と七日との日本精神論上の大變革以前の著作、講演に於て、彼氏と全く同一の立場にあつたから、彼氏の第二世第三世第四世第五世と、恐くは、數限なく、反天之御中主神、反不生不滅の神即ち日本元始の大思想を拒み來り、實在性を否定し、表面の忠君は、内面の不臣を慕露せざる人果して幾人ありや否や。表の板碑には日本精神、裏石には支那思想を彫つて居る。

此等の人の中に於て、既に停年となりし故大學教授、今は或國學の學館長を務めて居らるる人あり、其の古事記の註解に於て、他の學者に對し、異彩を放ちつゝあり、天之御中主神は高天原になりませるとは成り出でませりは、即ち生れ出てませりとありても、無から有を生じたのではない。元よりあつたのが、形を變へて出たのである、天之御中主神は、印度から

輸入した思想でなく、支那から輸入した思想でなく、日本人の頭から産出したのであり、日本人獨特の考であり。神は無始無終の神であると斷言してゐる。だが、此の語には矛盾がある。日本人の頭から産出したと云ふと、其の産出した日本人が原因たる「有」であつて、神は矢張り無で、無が日本人の頭を有にして、日本人に創造された神である。其の言の中には、眞理もあるが、日本人の産出したと云はゞ、無始無終でなく、有始有終の神で、そんな神は自ら獨立した神でなく、日本人が神の造り主である。有始無終即ち相對である人間が作り出した神は、小説や畫や彫刻やの主人公であつて、實在性はない神話の神、傳説のクリオスである。かゝる説明では、他の學者よりも、日本精神を理解してゐる様で、其の實は、他の學者と均しき曲學阿世か、無知無識の徒であつて、其の越歴を通じて、世を誤り人を禍する人である。かゝる人は基督道に於ける米英依存を依然離れない神學



者と同じだ。只差のある點は、基督者の方は、直接のアリアン神學の汎神化せる教義の維持者としての生滅の神を説くのと、日本の國學者の方は、表面だけは、日本精神の擁護者で、裏面は、思想上歐米依存の基督者と均しき歐米の生物史觀の神を維持するのか、唯物史觀の物質萬能主義者かである。かく考へ來ると、或日本人の現在は、眞の日本精神からは、アナテマさるべき者が決して尠しとしないのだ。

然らば日本人として、天之御中主神を如何に理解すべきか。日本の基督者として、古事記の天之御中主神、日本紀の天之御中主尊は如何に認識すべきか。兎に角、茲で一寸日本精神史の上世紀か中世紀かを懐古する必要がある、古事記の本文は稗田阿禮の意を傳へたものであつて、誠に完美と稱すべきだが。古事記の序文即ち太安麿の文は、造化など云つて、汎神教化してゐる。それから日本書紀も一書に創造三神の記録があるが、古事記

に比べると遙に劣つてゐる。又支那の淮南子、三五略史等の用語其の儘を載せてあるのみならず、國常立尊から始まつてゐるのは、印度化、支那化の部分がある。(或人は、其の思想の系統が日本的なりと辨證してゐても)。此の外、古語拾遺も國常立尊から始めてゐる(國常立尊即ち天之御中主尊と記されても)山鹿素行の中朝事實、北畠親房の神皇正統記、岩垣松苗の國史略等々は、支那の十八史略と均しく、天皇氏兄弟十二人齡各一萬八千歳とあると同じく、大神祇を除外してゐる。だから先づ古事記の研究より始むべしだ。其の古事記の誤りなき研究は如何にして始むべきか。今の書店にある古事記の註解を以てすべきか。これは既に余の云ひし如く、天之御中主神を正解してゐなかつたから、無駄である。寧ろ「古典保存會」から、寫眞版にして頒布した四大寫本に基きて研究せよ。

一は、名古屋大須町の眞福寺にある國寶たる古事記、是は今より五百年



以前の僧賢瑜の寫本である。假名がないから研究上不便であるが、學者としての研究には、最古の寫本として必要であり、貴重なものである。只一つ重要な缺點を擧ぐると、天之常立神のくだりに、此の二柱の神は「並」の文字のある事だ、是は思想上の邪魔な文字だ、宗學史の光よりしても、三柱の神は「並」は三位一體學上必須の文字なれど、茲では二位一體などと非合理にして「莫須有」のことだ、他の三寫本の如くない方がよろしい。

伊勢本、松井簡治博士所藏の古事記、是は缺本で、上の卷即ち神代の卷しかない。でも研究上他に得難き長所がある。それは、訓を左方の「一」記號をもつて、對句を示してゐる。否續句を示し、「一」記號のない時は、間投詞を必要とする事を教へる。即ち「と」とか「に」とか「の」とかの必要を示してゐる。神や神々やの訓方にも「一」記號をもつて相接續せることを示してゐる。

伊勢一本と云ふのは、余も「古典保存會」の寫眞版を所有してゐるが、之も缺本で、神代の卷しかなくて、伊勢本と殆ど様を同じくしてゐる。振假名も、伊勢本と均しくまばらに附けてあり、僧春瑜の寫せし物である。前の伊勢本即ち僧道祥の寫せし物を寫せしか、又は兩寫本共、同一の原本より寫せしものなるべし。

室町本即ち猪熊信男氏の所藏にかゝる處から、猪熊本と云はるる寫本、是は振假名最多く、亦上中下三卷そろつてゐて、天之御中主神より推古帝の處まで、古事記全部が記されてゐる。他の三本と異りて、三柱神は並「ならびに」即ち片假名をもつて「ナラビニ」と假名がつけてある。是は、我等の如き世界派の學者に取りては、●ハネ一書五の七にある「父と言ハキリスト」と精靈と此の三の者は、三にして一つなり」と共通する三位一體的大思想を明示してゐる。戰車並に飛行機、理髮並に美容術と云ふ時のやう



に、此の並には、前の者に異りて、後の者のあることを示す言であるから三柱は三柱でなくして、唯一であり、此の唯一は唯一に非ずして、三柱なりと解さるる大切な訓方である、父と子と精靈との三つは、三に非ずして唯一、此の唯一は唯一に非ずして、三つなりで、三位一體の神は、三神に非ずして、一神であるから、三柱で又一神、一神で又三柱となり、神は一生命にして三意識である。三意識で一生命の神であることとなる。宗學史上、神學史上これ程大切な文字はあるまい。従つて訓方も誠に機微を極めるのだ。今の世は擧げて、本居派の古訓古事記に由つてゐるから、「此三柱神は並〔みな〕ひとり神なりましてみ身を隠しましき」と訓んでゐる、それで、今の日本人は、日本人の祖神は、多神教中に位すべき三神論（トライセイズム）となつてしまつてゐる。之が爲、古事記の讀方が他に曲解を餘儀なくされることとなつてゐる。例之、天つ神諸命（此の諸の字）を猪

熊本では、本文は國寶本、春瑜本、伊勢本と均しく諸の字を用ゐてあるが、右側に朱で語〔みことのり〕を意味するの字を書いてある。「此の寫本時代より二百年後の寛永廿一年、京都前川茂右衛門開版とある木版最初の本〔小生所持す〕の本文は、猪熊本の本文の「諸」は用ゐず、「詰」を本文にしてゐる。寛永の木版は、同じ京都同士として、猪熊本より寫せしものなるべし。木版は猪熊本より振假名多し。「並」に戻りて云はんか。漢字の並は、説文によると、「井」二を一に重ねたもので即ち井即ち、並となり、井、並、併、并は同一の文字である。此の文字は「みな」と字引によんでゐるが「なみ」「ならびに」「あはせて」「かねて」とも訓んでゐる。古事記の何れの本にも併せて幾柱の神とある處では、例外なく「併（あは）せて」と訓んでゐる。熊猪木開卷第一の所に「古事記并〔あはせて〕序と訓んでゐるのは、三柱の神は並の「並」を「あはせて」と訓むことの無理からぬことを後の「併



せて。幾柱」と共に暗示してゐる。余の近く出版せんとする正訓古事記には、「此の三柱の神は並せて獨神な〔に〕あ」の略〕りまして、御身を隠りませり」とせんとしてゐる。

北里闌氏や小生やの「古代神道は一神教なり」の主張に於て、古事記本文の訓方に就きて鬪ふ處は、「天つ神の諸の命もちて、伊邪那岐命、伊邪那美命に詔り給ふて」とある所だ。此につきて、伊勢本に「天神諸命」とある所に、天神の天と神との間の左側に「一」徽號しごうを持つて、天と神とを接続させ、諸と命との間の左側に、「一」徽號しごうを持ちて、諸と命とを接続させて、「天つ神の諸の命を持ちて」と訓むべくしむけてゐる。天神と諸命とを二のグループに別ければ、兩熟字の間に「の」とか「に」とか「と」とかを入れて訓むべきである、余は茲では、天神の諸命と「の」を入れて訓むのが正しいと思ふ。天つ神とは單數で、命はもろくで、複數となるのだ、そこで、

原始神道の神は多神教に非ず、一神教となる。チエンバレンの英譯古事記は、本居宣長の古事記傳、平田篤胤の古史傳に基きしと見えて、ヘブンリー、デイチーと單數に譯さず、複數に譯して。ヘブンリー、デーチースとなつてゐる。日本人の古代信仰を一神教とせずして、多神教とすることは、日本人祖先への冒瀆にはならないか。宣長が其の弟子によりて出版した古訓古事記は「天つ神もろもろの命もちて」としてあるが、其の兩氏の註解本には、神を複數に説明してゐる。今日の古事記の註解は皆と云つても誤りでない位に、並「みな」と訓んである。國學の大家達には、あの伊勢一本の「一」じるしは、目に遣入らなかつたものか、日本精神の爲に惜みても惜むき事であつた。

古事記の正訓正解に續きて、最も必要な事は、保羅のアレオバゴスに於ける説教である。



保羅は小亞細亞から、歐羅巴のピリピ、テサロニケ、ペレヤを経て、紀元五十一年の夏、ギリクのアテネに到り、彼はアテネの愚夫愚婦が迷信をなけき、又三百年内外昔のエピクロス(佛教眞宗の如き)の功利教、ゼノンのストイック哲學即ち日本の禪宗の如き悟りと不動心とを中心に修業する人々と議論し、遂に古代裁判所であつたアレオバゴスの岡に登らせられて、新ものすき、流行物好みの大衆に大演説を試み、彼等の知れないと定めてゐたか、誰か説明してくれたら分ると思つてゐるかも知れないが、祀らねば、其の神の崇り恐るべしと「知らざる神」の碑を建ててあつたので、保羅は、その碑から話を進めて、汝等の知らずして拜んでゐる神を御知らせ申さう。神は知らねばならない、無識は罪惡なりと迄云ひし保羅は、かゝる知識を渴望する哲學者こそ、保羅の最もよき傳道地に値する心理の持主として、最も得意な思で話されたであらう。神は人の創造の神社の靈と

して住まず、神は一神故に、一人の大先祖アダムより多くの民族を生じ、時間と空間とを包蔵する神は、パンエンセイズム即ち萬有包含神として、時空に超越する絶對神即ち向のない神、相手のない神は、萬有の靈長にして、神自らの生命のタイプに従ひて、否、み身を隠りませりてふ神のアンテ、タイプに従つて、人を己れの胎内に包蔵する神として、之を愛育し給ひ、人は子として親なる神の胎内にありて呼吸し、生き動き在るなり、生命それ自らも生命の包圍への働きかけ即ち動きつつ、實在しつつある。云々と説きて、神は知識にありて捕へ、又神自らの働きかけ、即ち顯肉の神、復活の人、基督に於て、神と人との歸趨を啓示し、我等に對する客觀として、我等を指導し給ふ。と少しも憶する所なく説いた。保羅は殊に其の説教に於て、神の實在性と非實在性とを區別して、恰も今日の日本の爲に説きおかれしかと思ふ。今日日本の思想界の中心問題たる天之御中主神は、



政治にては勿論完全。宗學に於て我等の顯肉神の知識と歴史的事實とにつきて如何なる關係におかれたるや、基督の實在を認むれば、天之御中主神は、實在せず、天御中主神の實在を肯定すれば、基督は不在か。或は兩神名は、名を異にして、内容の實は同じきか。

余は、茲に天之御中主神は、恰も詩人の頭よりさぐり出した神に均しく實在性あり、恰もユダヤ教が舊契約にての一神、マホメット教の一神、儒道の天即ち上帝は「至上の尊を意味すれば」至上神とすれば、一神教の理念のみか、實在性をさぐりあてたりと云ひて可なるべし。昆布を造る神、基督道の三派の天父又は天主、何れもは、神は人の造りし神に非ず、人こそ神の創造せるものなれ。とすれば、天之御中主神も人の考に製造せし神の神様に非ず、天之御中主神は、日本人の頭にて、發見した實在神なりと申さん。保羅が異邦の詩人が「神の裔」の神を認め、實在性ありとせし

は、我等の天之御中主神の存在性は、他の神名と均しく、彼に實在性ありとし、我等アダムは神の子なりと云ふ如く、日本人としての神の子は、神なる親即ち天之御中主神に實在性を認め、我等日本人の先祖が認めし神、即ちさぐりあてし神である。それならば、基督のそれが、曰くそれだとも云はれ、それでないとも云はるる。

我等はユダヤ教の神に於て、回教の神に於て、又、異端の多き世界の基督道三派の信する一神に於て、更に我等が日本に於て、元始神道の千二百年間、それ以上に絶えたる神觀が、今や我等にありて、復活したるが、その我等にのみありて、元始基督道も亦復活しつゝあることなるが、各の禮拜の目標として、それぞれの禮拜する一神は、今や互に排斥して、己の目標の神にのみ事へつゝあり、茲に於て、我等は思ふ、古典即ち舊契約に於ての神、アボクリファに於ての神（中契約もどきか）新契約の神に實在性



を均しく認めて、多くの神にならず、單一の神に歸一されての實在性を承認されざるや、大方の人は神の實在性を各の神の名に於て認めてある。神の多の名ありても、拜さるる神は唯一なり、只新契約の神は啓示の理解に於ての神、神より客觀的に働きかけたる基督に於ての神、顯肉の神、最も具體的神靈なり。他は天之御中主神を始め、神觀として、人の主觀が多く働く神、眞理性はある神、實在性はある神なれど、天啓である元始基督道である神の部分理解に對して同じ部分の理解なり。部分は不完全に非ず、不完全は罪惡を意味すれど、部分は罪惡に非ず、部分は全體の中の要素なり。之は十盲象をさぐるが如くに非ず、十明象を挿る事にはあれど。發見、啓示なしに、全的に眞理を視ること能はず、發見を待ち啓示の受領を待つて、神の部分觀より全體觀に到るのだ。我等は天之御中主神の實在性を認むる其の發見的部分觀に於て、或は啓示者、顯肉神に於て、神の全體理解

に達し得んと告白す。(信教必須の過程を経て)。保羅は廿八節より廿九節に到りて、一神教に於て、詩人アラトス又はクレアンテスの「我等はその裔なり」とせし神の實在性を認め、夫を是認せしと雖ども、人間の創造畫として、人の彫刻としての神、金銀木石の偶像神、人の神話に基く神などは、全然否定されたれば、我等も天之御中主神に一神教としての實在性を認め、その外の人の作りし神には(神々は別)決してその實在性を認めては宜しからず。かくて、元始基督道の先達、保羅の夫に必ず一致するを以て可とす。

天之御中主神を正解する清句

一・ 獨のみ神を

畏み畏む

道こそ廣かる

世々の道なれ

折返。我等も畏め 獨の神を



432  
80

- 一。 惟神と云ふ  
廣かる世人の  
道にぞ均し
- 二。 生れたる神は  
大み示しなる
- 三。 またき正道に  
異ると知れ
- 四。 アボクリファに云ふ  
み神も眞に  
一方なるぞ
- 五。 あれどもさとの  
み神は説くとも
- 六。 眞理のまたき  
悟んは後ぞ
- 七。 古ごと文なる  
み神は漬さず
- 八。 くらべて學べや  
神の示しに

昭和十七年十二月二十日納本  
昭和十七年十二月二十三日發行 〔定價金五拾錢〕

東京市澁谷區松濤町三七番地  
著作人 尾 島 眞 治  
東京市赤坂區丹後町九七番地  
印刷人 照 井 廣 吉  
東京市赤坂區丹後町九七番地  
印刷所 照 井 印刷所  
(東東一三〇九)

發行所  
東京市澁谷區松濤町三七番地  
信 賴 舍  
振替東京八四四二六番



終

